

言ひなす格をいふ 活格は「行下二段活なり 俗言にサ

シ上ゲマス」また「マウシマス」と譯す たどへは

彼を君に参らする

物を獻らする

思ひまゐらする

誘ひまゐらする

なごやうの「参らする」獻らする「思ひまゐらする」誘ひまゐらする「のごとく重に他の動詞に添はりて活き、また獨り立ちても活く類これなり

第十五目 奉る

奉るとは「立て服従ひ在る」の義にて貴人を上に立て、服従ふ意により「上ぐる」といふ詞を敬語に言ひなす格を

いふ 活格は「行四段活格なり 俗言に「オ上ゲマウス」ま

た「マウシマス」と譯す たどへは

御衣奉る

君にたてまつる

見たてまつる

迎へまつる

なごやうの「奉る」見たてまつる「迎へまつる」のごとく重に他の動詞に添はりて活き、また獨り立ちても活く類これなり

第十六目 侍る

侍るとは「這ひ群れ在る」の義にて君の御前に臣下が一同に平伏して這ひ在る意により「居る」といふ詞を敬語に言

ひなす格をいふ「活格はら行一格なり」俗言に「居リマス」
また「マス」と譯す たどへは

御前に侍る

聞こえはべる

待ちはべる

なごやうの「侍る」聞こえはべる「待ちはべる」のごとく重に
他の動詞に添はりて活き、また獨り立ちても活く類これ
なり

第十七目 候ふ

候ふとは「側守り合ふ」の義なり ゆゑにさぶらふが本言
にて臣下が君の御側に一同守り合ふ意によりやはり「居
る」といふ詞を敬語に言ひなす格をいふ 活格は「行四段

活格なり 俗言に「居リマス」また「マス」と譯す たどへは

御側に候ふ

獨りさぶらふ

畏りさうらふ

存じそろ

なごやうの「候ふさぶらふ」畏りさうらふ「存じそろ」のごと
く重に他の動詞に添はりて活き、また獨り立ちても活く
類これなり

第十八目 仕る

仕るとは「仕へ奉る」の義なり ゆゑにつかへまつるが本
言にて臣下が君に仕へ奉る意により「爲る」といふ詞を敬
語に言ひなす格をいふ

たゞし仕るは此方なる自身の所爲に屬きて言ひ、遊は
すは彼方なる貴人の所爲に屬きて言ふ差別こそ有れ
共に「爲る」といふ詞を敬語に言ひなす格を知るべし
活格はら行四段活格なり 俗言に「致シマス」と譯す
たどへは

宿直仕る

御供つかへまつる

勉強つかまつる

などやうの「仕るつかへまつる」のごとく獨り立ちてのみ
活く類これなり

第三節 複性崇敬格

複性崇敬格とは他の動詞の語尾に添はり複活だちにて敬

意を表はす格をいふ これを類別して

令せたまふ

被るゝ

令せらるゝ

給ふる

の四種とす

第一目 令せたまふ

令せたまふとは「指し責め給ふ」の義なり ゆゑに令しめ
たまふが本言にて令せたまふは約言と知るべし そは貴
人は物を自身爲ること無く人に命じて、さするものなれ
は指して「これ爲よ」と責め言ひつくる意により然言ひな
として、いたく敬ふ意に用ふる敬語の格をいふ 活格はは行

四段活格なり 俗言に「成シクダサル」と譯す たどへは

歌詠ませたまふ

老長オナガひさせたまふ

學問を爲ツクリさせたまふ

卒業せさせたまふ

教へしめたまふ

旅行せしめたまふ

なごやうの「詠ませたまふ」老長ひさせたまふ爲させたまふ卒業せさせたまふ教へしめたまふ旅行せしめたまふのごとく獨り立ちては活かすして必ず他の動詞に添はりてのみ復活だちに活く類これなり

第二目 被るゝ

被るゝとは「觸れ垂るゝ」の義にて極めて勢ある人或は貴人から恩惠若くは威力の、身に觸れ垂るゝを受け被る意により然言ひなして、いたく敬ふ意に用ふる敬語の格をいふ 活格は「行下二段活なり 俗言に「成サレル」と譯す たどへは

御勉強せらるゝ

行ひ澄まさるゝ

若君は野に遊はるゝ

先生が吾に教へらるゝ

なごやうの「せらるゝ」行ひ澄まさるゝ遊はるゝ教へらるゝ「」のごとく必ず他の動詞に添はりてのみ復活だちに活く類これなり

第三目 令せらるゝ

令せらるゝとは「指し責め被るゝ」の義にて被るゝよりも、
 なほ極めて責き意に用ふる敬語の格をいふ 活格は「行
 下二段活なり 俗言に「成サセラレル」と譯す たゞへは
 人を召して問は令らるゝ
 南おもてに渡らせらるゝ
 曉に起きさせらるゝ
 御遊覽させらるゝ
 御遊びませさせらるゝ
 などやうの「問は令らるゝ」「渡らせらるゝ」「起きさせらるゝ」
 御遊覽させらるゝ」「させらるゝ」のごとく必ず他の動
 詞に添はりてのみ複活だちに活く類これなり

第四目 給ふる

給ふるとは「給は令る」の義にて自分の心吾が身ながら貴
 人から左様に思はしめ然らざる意に言ひなして、い
 たく敬ふ志を表する敬語の格をいふ
 たゞし給ふるは此方なる自身の所爲に屬きて言ひ、給
 ふは彼方なる貴人の所爲に屬きて言ふ例なり そは俗
 の手紙に「奉存候ふ」とやうに自分の文言に「奉候ふ」と
 言ふ敬語を添へて先方を敬ふ意を表すると同格なり
 ゆゑにその「奉存候ふ」は雅の消息文にては「思ひたまふ
 る」と書く例なり
 活格は「行下二段活なり 俗言に「存ジマス」と譯す た
 ゞへは

斯く思ひ給ふる

然様に心得たまふる

その通り考へたまふる

なごやうの「思ひ給ふる」心得たまふる「考へたまふる」のごとく必ず他の動詞に添はりてのみ復活だちに活く類これなり

前章各條において詞辭論すなはち(詞の成立法)の部門は第十一章までを、もて名詞動詞靈辭における大小部目の種類別け、ならびに、その一詞一辭の上についての性質効用および定義、また動詞の活用基法ならびに動詞の時格動詞の語脉格動詞の化名格動詞の語尾結尾、また靈辭の起首結尾および關係接續、また詞辭連續語尾斷續の通則

明治廿七年六月十八日完結
全 年十月廿八日合本

講速者 林 復臣

林羅廷臣 新式日本画公役日記
講流

第一號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第二號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第三號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第四號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第五號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第六號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第七號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第八號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第九號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十一號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十二號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十三號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十四號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十五號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十六號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十七號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十八號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第十九號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第二十號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第二十一號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第二十二號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第二十三號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

第二十四號 西曆一九〇九年九月廿七日
印

弟才多
全近去後りん
六日
印
六日

弟才多
田中
印

弟才多
田中
印

松本

後三辨宛
松本

弟才多
田中
印

弟才多
田中
印

弟才多
田中
印

弟才多
田中
印

弟才多
田中
印

困
田中
印

弟才多
田中
印

弟才多
田中
印

弟才多
田中
印

新式 閣下 日本文典 合本 刊行年月

上編

明治三十四年十月二十四日印刷
全 二十四年十月二十日出版
全 二十四年九月十五日訂正再版
全 二十五年五月二十日訂正三版

中編

明治三十五年二月二十五日印刷
全年三月二十七日出版

下編之卷一

明治三十五年九月二十日印刷

下編之卷二

明治三十七年七月二日印刷
全年七月五日發行

附録

音聲論

明治三十六年十二月五日印刷
全年十二月六日發行

以上五冊也

合冊、初刊以上、如シ再後版ヲ重
ネタリ

前告

新編 日本文典

一號

此書は、従来の日本文典とは異なり、新編の形に採られた。従来の日本文典は、漢字の形や音を主として記述して来たが、本書は、漢字の用法や語源、またその歴史を主として記述して来た。これは、従来の日本文典とは異なり、新編の形に採られた。従来の日本文典は、漢字の形や音を主として記述して来たが、本書は、漢字の用法や語源、またその歴史を主として記述して来た。これは、従来の日本文典とは異なり、新編の形に採られた。

本書は、従来の日本文典とは異なり、新編の形に採られた。従来の日本文典は、漢字の形や音を主として記述して来たが、本書は、漢字の用法や語源、またその歴史を主として記述して来た。これは、従来の日本文典とは異なり、新編の形に採られた。従来の日本文典は、漢字の形や音を主として記述して来たが、本書は、漢字の用法や語源、またその歴史を主として記述して来た。これは、従来の日本文典とは異なり、新編の形に採られた。

發行所 國文學會事務所

謹告

新編 日本文典

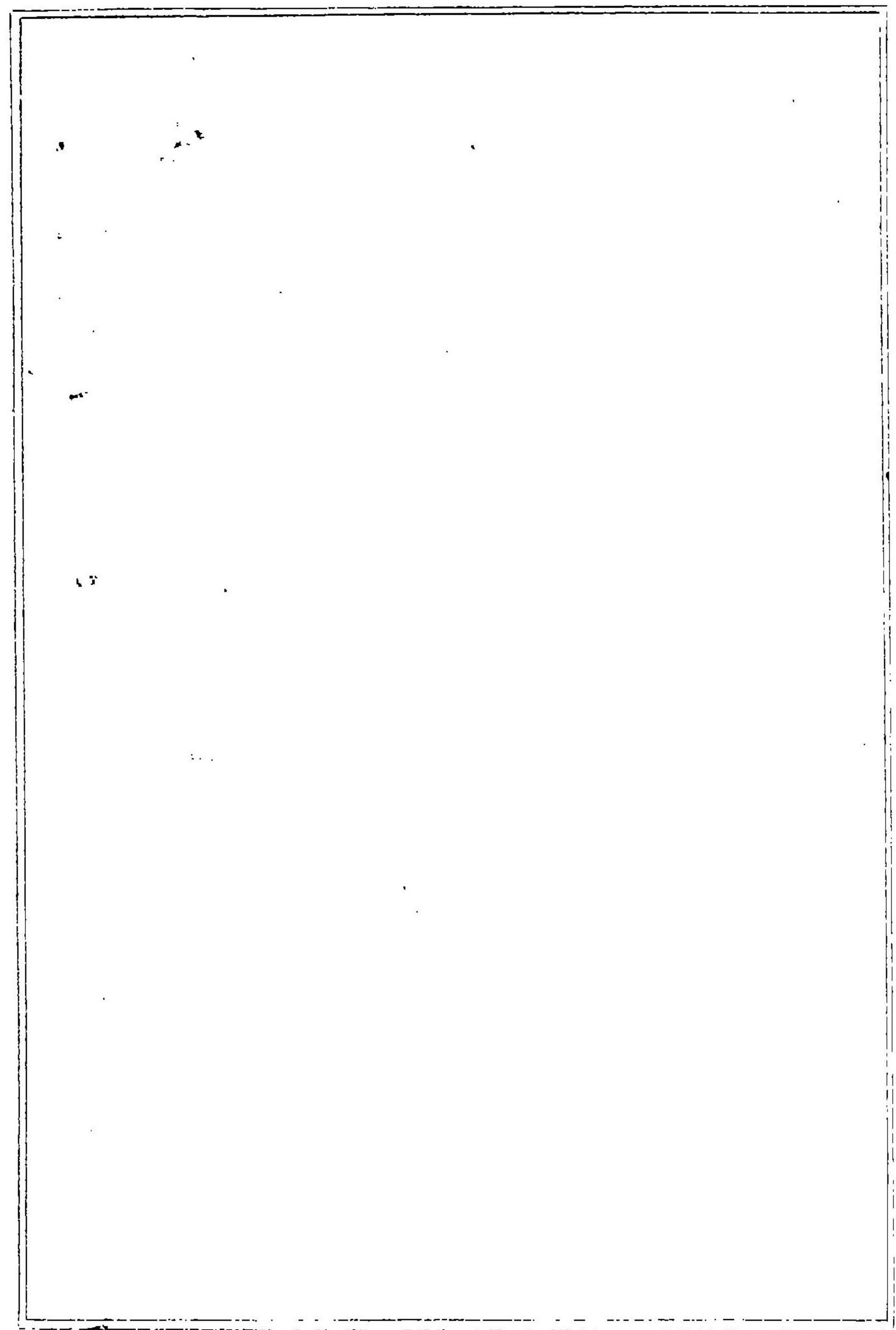
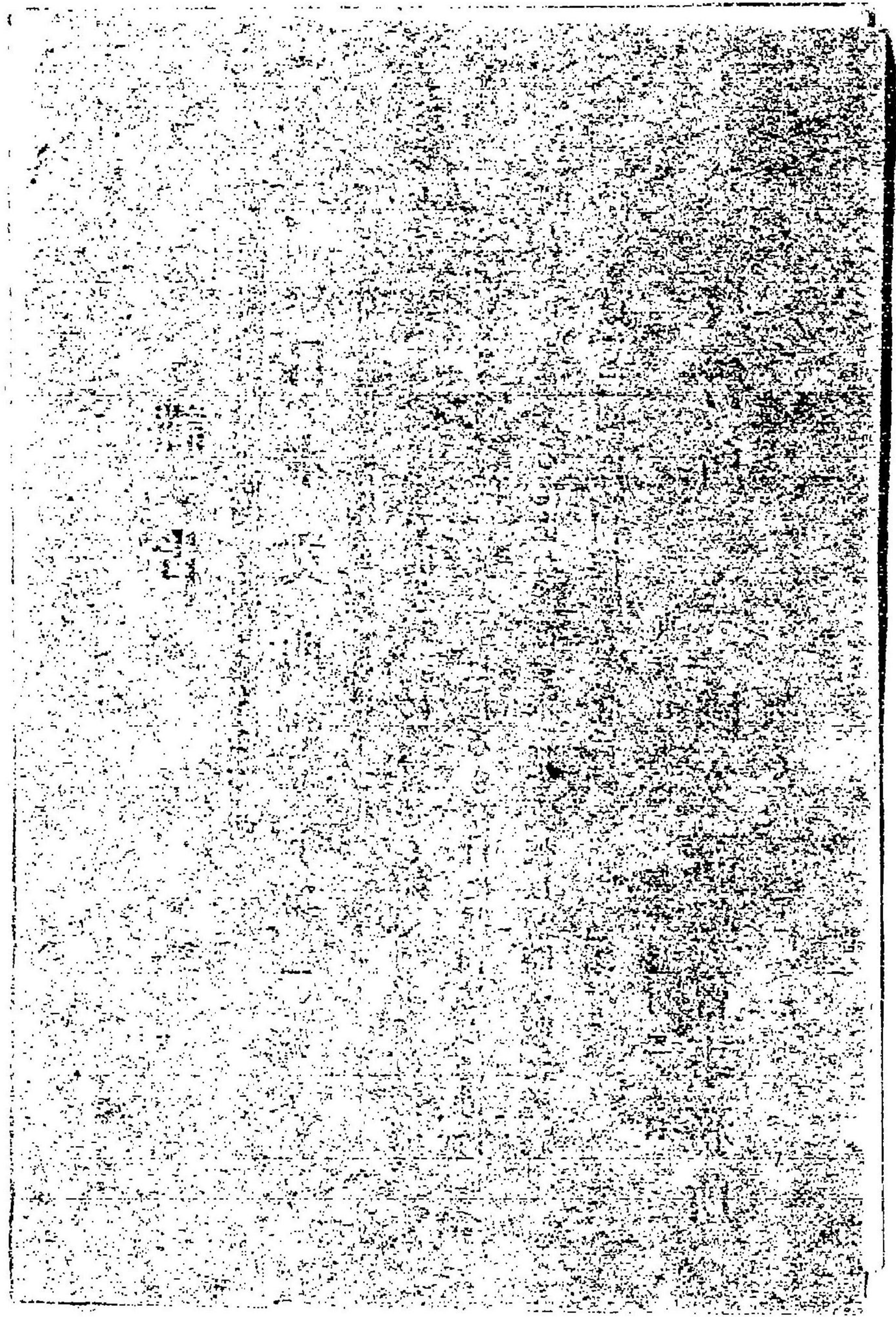
第一號

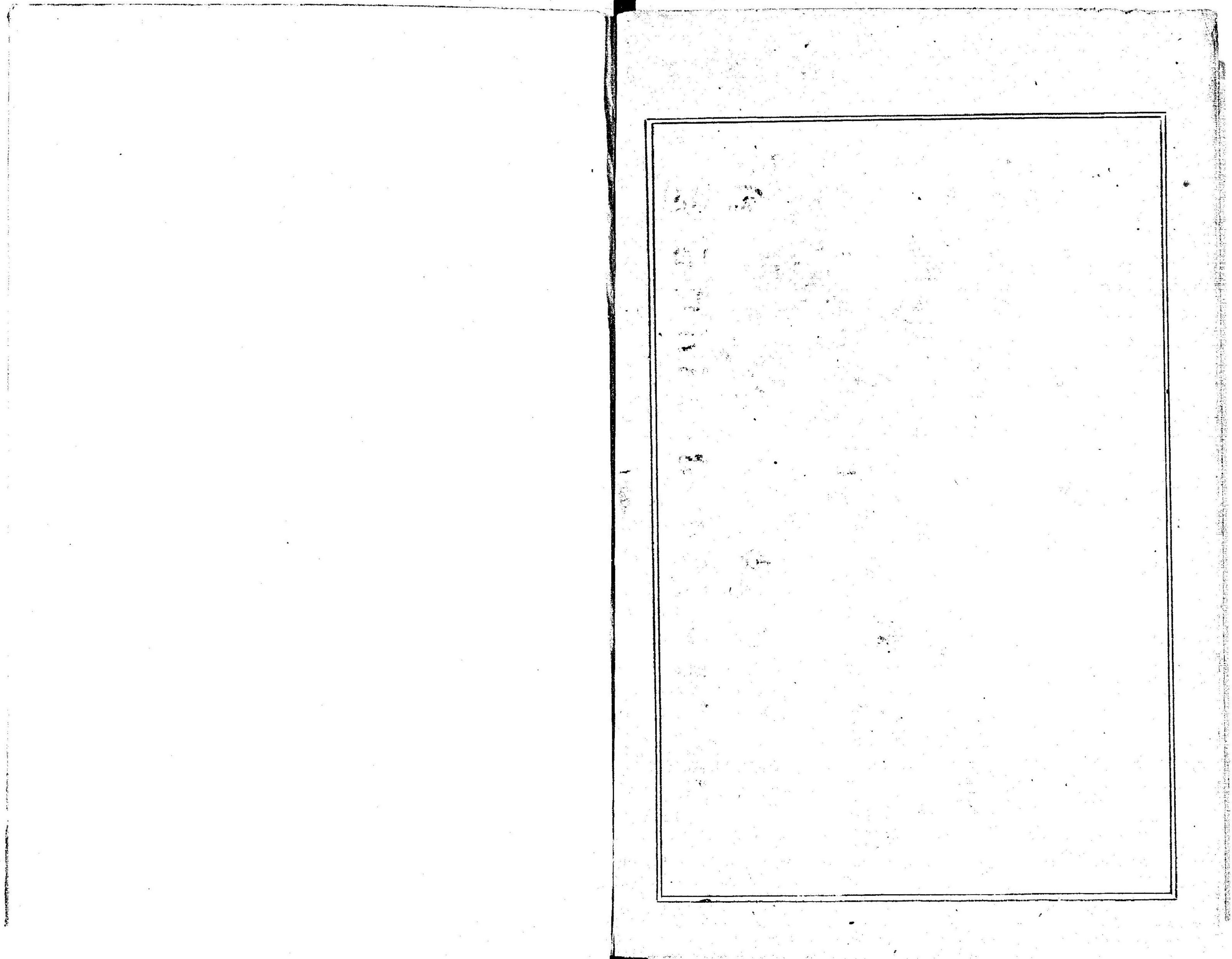
本誌前編附録は爲て開卷緒論に接ぎせし如く詞辭論の傍兼修すべし者本文體論既の號に重むたるも今日に連刊せしに付昏混四方より頻りなるに止む能はず本編廿九號は暫時次號に差繰り附録を以て二回程續刊候間看察此旨御承察せよ

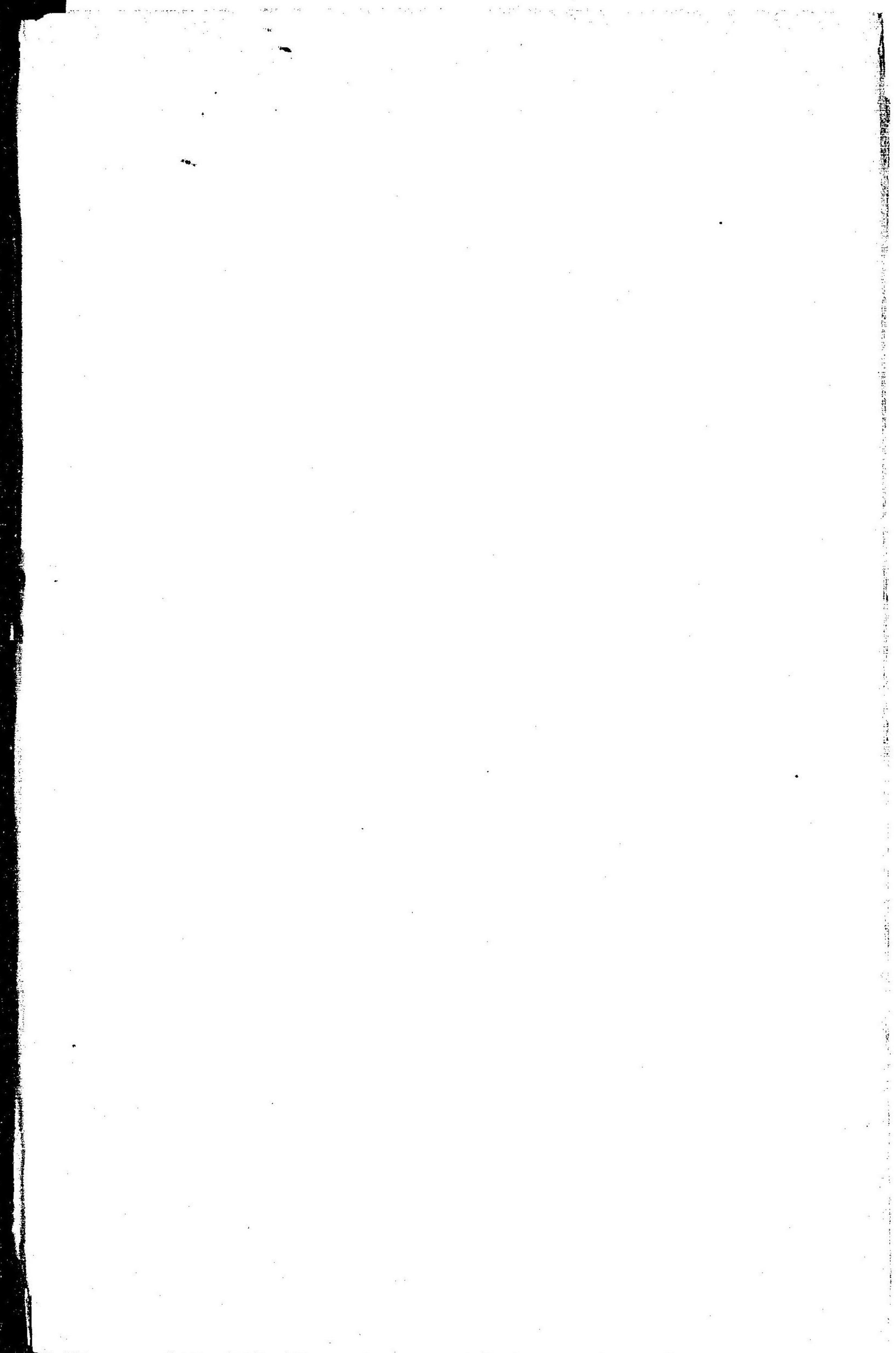
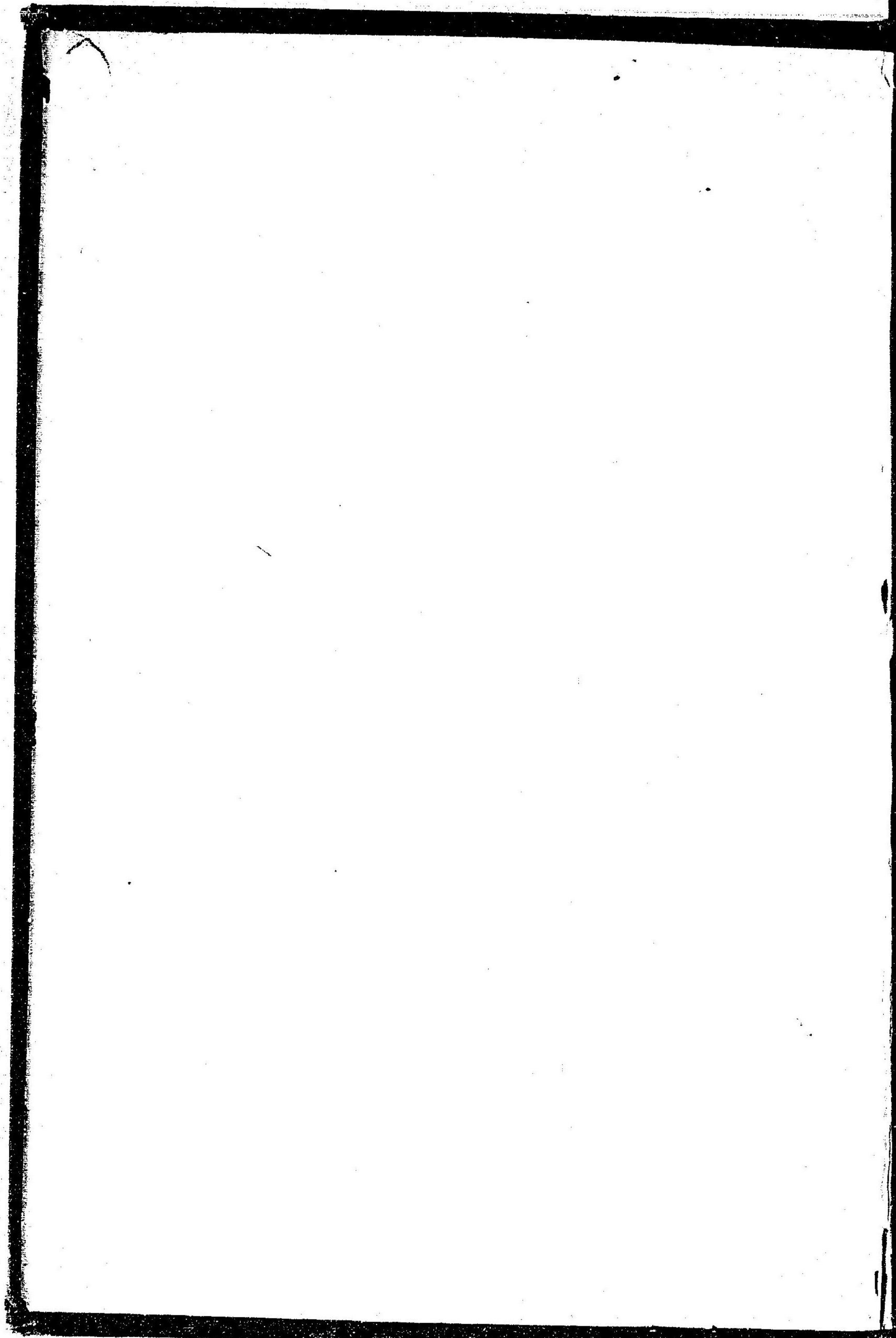
東京日本橋區本傳馬町三丁目

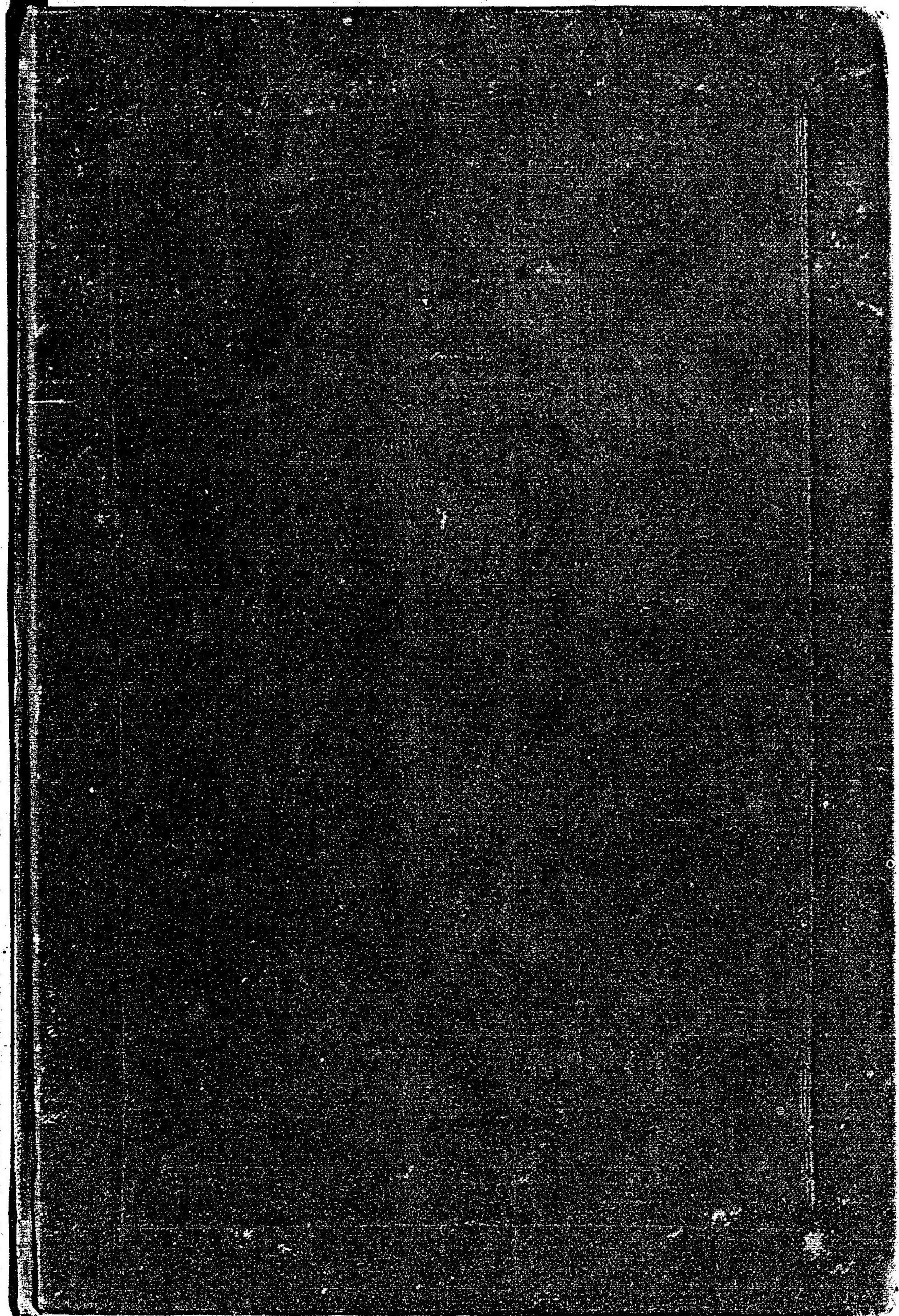
發行所

國文語學會事務所









815
H384n

(M)

078561-001-5

815-H384n

日本文典(開発新式)

林 夔臣/述

上

M24-27

DAC-2276

